Jems News
No. 160
2026 年 11 月 5 日
日本環境変異原ゲノム学会
https://www.j-ems.org

＊＊＊＊＊＊＊＊　第 14 回 ICEM 参加記　＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第 14 回 ICEM 参加記

株式会社ゼノバイオティック
澤田　敏彦

この度，9 月 6 日から 10 日の間，スコットランドのエディンバラで開催された 14th International Conference on Environmental Mutagens（ICEM）に参加しました．本会は，国際環境変異ゲノミクス学会連合（IAEMGS）のもと，欧州環境変異ゲノミクス学会と英国環境変異原学会の共同により組織され，IAEMGS 会長 Prof. Dr. Gareth Jenkins をはじめとする各種 Committee により企画運営されました．本会のテーマは，“Blending new technology with traditional genotoxicity approaches to solve real world problems”で，いずれの基調講演，セッションも活況でした．

本会に参加するにあたり，日本環境変異原ゲノム学会（JEMS）から旅費の補助を賜りました．厚く御礼申し上げます．また JEMS の推薦のもと Programme Committee の一員として本会のセッション“Computational Toxicology, AI, and QSAR are driving innovation in risk assessment methods”の企画運営を担う機会に恵まれました．重ねて御礼申し上げます．

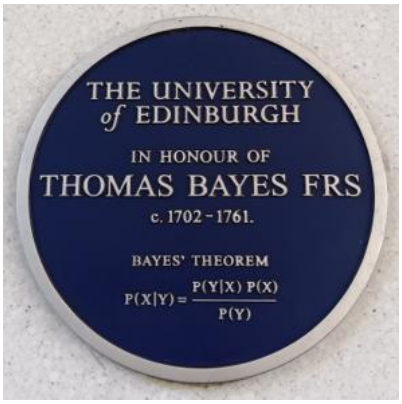
本稿では，私が担当したセッションから，Johns Hopkins 大学 Prof. Dr. Thomas Hartung の講演“Artificial intelligence – it's the end of the tox as we know it (and I feel fine)”について簡単に紹介します．この講演では，AI の方法論や QSAR の開発・適用といった詳細には深く立ち入らず，先見的な視点（ムーンショット）から毒性学が語られました．キーワードとして，exposome，epigenotoxicity，evidence-based AI 等が挙げられます．ここでは，私の拙い理解をお伝えするよりも，講演中に言及された最新の情報をそのまま共有する方が皆様の参考になると思いますので，以下にいくつか列挙いたします．

- Global Exposome Summit April 26 – 29, 2027
  https://globalexposomeforum.org/upcoming/globalexposomesummit/
- Hartung et al., The Need for Epigenotoxicity Testing, ALTEX Vol.42, No.4, 2025, 565-590.
  https://doi.org/10.14573/altex.2509281
- Luechtefeld & Hartung, Evidence-based AI: from trailblazer to trustblazer ?, Front. Artif. Intell. Vol.9, 2026.
  https://doi.org/10.3389/frai.2026.1818128

学会会場から一歩外にでますと，徒歩圏内に国立美術館，国立博物館，エディンバラ城，エディンバラ大学があり，学会の合間を縫って見学された方もいらしたようです．私の専門は，機械学習による毒性予測であり，エディンバラ大学といえば，ベイズの定理で著名な Thomas Bayes の出身校です．というわけで，私は足早にエディンバラ大学ベイズ・センターを見学しました．そのスタイリッシュさと本気度に圧倒されました．

最後に，第 14 回 ICEM への参加を通じて得ました経験，学び，出会い等を今後の研究に活かすと同時に，JEMS の皆様に少しでも還元できますよう，活動してまいります．この度の旅費のご補助，誠にありがとうございました．





第 14 回 ICEM 参加記

大阪公立大学大学院 理学研究科
環境分子毒性学研究室
博士前期課程 2 年 中塚 世愛子

この度日本環境変異原ゲノム学会からご支援いただき,9 月 6 日から 9 月 10 日までスコットランドの首都エディンバラで開催された 14th International Conference on Environmental Mutagens（ICEM）2026 に参加しました.

可愛い子には旅をさせよということでしょうか．指導教官である川西優喜教授をはじめ，研究室の先生方に背中を押していただき，ひとりエディンバラへ出発しました．日本ではまだ残暑が続く 9 月でしたが，エディンバラは昼間でも 20℃を下回る過ごしやすい気候でした．エディンバラ城を中心に広がる石畳の街並みや，歴史を感じさせる建物が続き，街を歩くだけでも心地よい時間を過ごすことができました.

学会が開催された Edinburgh International Conference Centre（EICC）は 1995 年の建設時にスペース活用のために世界で初めて回転式の客席を採用するなど，革新的な設備を導入してきた国際会議場です．会場では環境変異やゲノミクスに関するシンポジウムやプラットフォームセッションが数多く開催されました．ポスターセッション 1 日目には同じ分野の研究者による発表も多く，自身の研究と関連する内容を直接聞くことができ，とても勉強になりました．また世界各国から研究者が集まり，一つの研究テーマについて議論を交わす場に参加することで，国際学会ならではの研究交流を肌で感じることができました.

私はポスターセッション 2 日目に“Effects of PFAS exposure on immune and reproductive functions during the prepubertal period”というタイトルで発表を行いました．初めての国際学会で不安な気持ちのまま発表に臨みましたが，多分野の研究者の方から質問をいただき，活発な議論ができました．最後に「これからの研究が楽しみだ」と声をかけてくださった方もいらっしゃり，今後の研究生活に向けた大きな励みになりました.

学会を通して英語で自分の考えを十分に伝えられず，もどかしさを感じる場面がありましたが，参加者の皆さんが温かく受け入れてくださり，拙い英語ながらも耳を傾けていただける環境で意見交換ができました．また PhD 学生の方々と交流する機会にも恵まれ，お互いの国での文化や日常生活だけでなく，研究生活や研究環境についても話すことができ，大きな刺激を受けました.

今回の経験を通し，将来研究者として成長していく上で，自分の研究を国内外に発信し，積極的に交流していくことの大切さを改めて感じました．英語力の向上だけでなく，さまざまな研究者と主体的に議論する姿勢を大切にしながら，今後の研究活動に取り組んでいきたいと思います.

最後になりましたが，日本環境変異原ゲノム学会長の紙谷浩之先生，Genes and Environment 編集委員長の山田雅巳先生をはじめとする日本人参加者の皆様には，滞在中さまざまな場面でご配慮いただき，大変心強く感じながら学会に臨むことができました．この場をお借りして心より感謝申し上げます．また，ICEM 参加の機会を与えてくださいました皆様，ならびに旅費の援助をいただきました日本環境変異原ゲノム学会に心より御礼申し上げます．今回の貴重な経験を今後の研究活動に生かしてまいります.

